

作家と政治

—G. オールウェルの『1984年』の位置づけ

小 野 修

1 方 法

1984年はオールウェル (George Orwell, 1903-50) が最後の小説の題名 *Nineteen Eighty-Four* (1949)¹ とした年である。今から三年後の1984年に世界がこの小説で描かれたような状態になると本気で考えている人はま
ずいない。

しかし、オールウェルがこの小説の背景とした世界の三大軍事ブロック化の状態に、現代の世界が徐々に向いつつあると云えないだろうか。後にみるように、オールウェルが予言した世界の巨大軍事ブロック化は、大量破壊兵器の発達と拡散が世界戦争を避けさせる傾向を強めるが故に進展するのである。この場合、各軍事ブロックは衝突を避けて孤立し、それぞれの陣営内での専制体制は強化される。こうして、世界の破滅をもたらす戦争を避けようとする努力が、今度は、人類に隷従の道を歩ませるというオールウェルが提示してみせたディレンマは、今日、否定しきれない現実性を帯びはじめている。ソ連の対米軍事力増強が最大となる1984-85年を境に、今度は米軍事力がソ連の軍事力を追い抜いてゆくという予想を立てる人々は、1984-85年頃を第三次大戦が勃発するための一般的危機が最も高まる時期とみている。破滅的戦争を避け、且つ、全体主義的傾向の進展をはばむという二つの課題を人類は同時に解いていかなければならない状態におかれている。

『1984年』で描かれた技術的管理社会の様相が、それが執筆された1948年時点で想像された技術水準のレベルを出ていないとしてもそのこと自体は作品の欠点ではない。TVや盗聴装置やコンピューター技術の発達した今日では、ここで描かれた管理システムは技術面では驚異と思われるものは何もない。この作品の今日的性格は、むしろ、そこで描かれた抑圧的な体制と等質でありながら、技術上のレベルの差から外面的には違って見える専制的政治体制がオーウェル死後、地上で勢力を増大させてきたということである。従って、この作品を単にスターリニズムが技術的管理システムと結びついた場合の恐怖を描いたものとして把えるのでは、正しい位置づけにはならない。

オーウェルがこの作品の中で試みたモチーフの一つは、専制の行きつく先では、市民の反体制的な抵抗意志は政府により完全に探索されて挫かれるばかりか、積極的な服従心が拷問によって強制的に植え込まれるというものであった。これはスターリニズムの下でも、ナチの政権下でも、わが国の戦前戦中でも日常茶飯事であったわけだが、オーウェルはこれを将来の空想上の大陸国家オセアニアにまで拡大し、冷戦構造が逆に対立ブロック内での専制強化をもたらすことを予見したのだった。人間が雑草のように始末される状況が近年カンボジアで起ったことは周知の事実であるが、このような強権的な支配の状況が今後世界のどこで、いつ何時再発するか分からないという点では、オーウェルの『1984年』の世界は社会主義への道が現実にかかえる課題を提示しているのである。無論、オーウェルは反共反ソであったにせよ、資本主義の擁護者ではなかったし、彼の政治哲学はどちらかと云うと漸進的なフェビアンニズムの傾向を有していたが、社会主義でもなかった。それは強いて云えばヒューマニズム、人権擁護論者の立場だった。彼が『1984年』の中で示したマルクス主義思想の戯画としての「論文」エマニュエル・ゴールドスタイン (Emmanuel Goldstein) 著『少数独裁制集産主義の理論と実際』には²、それ自体をとりあげて論じて

みることもできるほどの興味深い内容を盛り込んである。というのも、これがカリカチュアではなく現実どこかの国の公式の理論であっても不思議ではない気持ちにさせるからである。しかし、『1948年』は政治論文ではなく、この興味ぶかい「論文」もオセアニアの興隆の背景の説明として持ち出されたあと、(惜しくも)突如として、その記述は打ち切られて、主人公ウィンストンキジュリアの「背徳」と「殉教」の物語のために写実的描写に切り替えられる。オーウェルが肅清させられてゆく二人をつき放して描いているのはたしかだが、二人が逮捕される直前、隠れ家の二階からみた洗濯物を干しながら唱っている頑丈なプロール(プロレタリア)の女には希望をよせて暖い眼を注いでいるといった見方が正しいかどうかは疑わしい。オーウェルは戦前、すでに『ウィガン波止場への道』(*THE ROAD TO WIGAN PIER*, 1937)を書いた段階で勤労者階級が未来を担うなどという期待感は捨ててしまっている。1946年段階でも、彼は一般大衆には次のような低い評価しか与えていない。

The masses, it seems, have vague aspirations towards liberty and human brotherhood, which are easily played upon by power-hungry individuals or minorities. So that history consists of a series of swindles, in which the masses are first lured into revolt by the promise of Utopia, and then, when they have done their job, enslaved over again by new masters.⁸

『1984年』を悲劇仕立てにすることによって、オーウェルはこの小説の政治的生命を救おうとしたのではなかろうか。大衆が愚鈍であることは果して救いとなりうるのか。大衆は全体主義が理解できない点で健全かもしれないがどっちみち全体主義の路線は彼らに強制されるのであるとオーウェルは云っているように思われる。

オーウェル論を1953年に書いたホプキンソン(Tom Hopkinson)は

『1984年』を酷評して次のように書いている。

The weakness of *Nineteen Eighty-Four* is a double one. Orwell, sick and dispirited, has imagined nothing new. His world of 1984 is the war-time world of 1944, but dirtier and more cruel – and with all the endurance and nobility which distinguished mankind in that upheaval, mysteriously drained away. Everyone by 1984 is to be a coward, a spy, and a betrayer.

Even technically, the book shows little imagination. The war of 1984 is fought with the weapon of 1944, rocket and tommyguns (. . .); and the horror which distorts life in the future is merely the horror that hangs over life to-day. (. . .)

The book's second weakness is another aspect of the first. By amputating all courage and self-sacrifice from his human beings, Orwell has removed any real tension from his story.⁴

これを信じれば『1984年』は一般的読者には不向きな作品で失敗作だということになる。こういう批評を無責任な批評と云う。ホブキンソンには凡そ政治意識などなく、あっても自分のおかれている1953年の肝心な状況がつかめない程度のものでしかない。オーウェルの狙いがどこにあり、何故、彼がこのような途方もない醜さを意図的に露呈した作品を書かざるを得なかったかが、ホブキンソンにはわからなかったのである。こういうところが、人物がうまく描けているかいないか、ドラマの組み立てがしっかりしているか、といった技巧的な面でしか文学作品を評価できない文芸評論家の限界なのである。

オーウェルの意図は全体主義社会の恐ろしく醜悪な状況とその思想的提示だったのである。ウッドコック (George Woodcock) はこの作品の特徴として政治的・理論的中心と人間関係をめぐる中心という二重中心説を

立て、そのどちらもが完全に生かされていないことをこの作品の弱点としているが⁵、人物は思想のために、はじめから意図的に犠牲にされていたと見るべきである。ホプキンソンが『1984年』に求めたのは求むべくもなかった人物である。いったい、ホプキンソンのような注文に応えうるような哲学小説などありうるだろうか。ヴォルテール (Voltaire) の『カンディード』 (Candide) においても人物はフラットでありつづけ、それでこそヴォルテールの思想は前面にあらわれ出ることができた。『1984』というような作品においては、人物がこれ以上に生き生きと描き出され、且つ思想がこれ以上に潤沢に盛られるというようなことを期待する方が無理である。オーウェルに人物創造の力量が欠けていると云うことができないのは彼の『動物農場』 *Animal Farm, a fairy story*, (1945) における登場動(人)物の描き方を想起すれば充分である。オーウェルは『1984年』を評論もしくは政治パンフレットと同類のものとして描こうとしたとみるべきであり、彼は伝達しようとしたある思想のために、敢て人物を犠牲にしたのだった。その意味からすればこれは評論と小説の中間的存在であり、それは広い意味におけるジャーナリズム (時事評論) に属する哲学小説なのである⁶。しかし、重要なことはこうした方法の問題よりも作品に盛られている内容であり、オーウェルの政治的傾向を帯びた作品群が今日もなお、その重要性を失っていない理由は、それらが提起した課題を今日の時代がまだ乗り超えられずにいるためである⁷。

2 課 題

オーウェルが『1984年』を執筆していた1948年という年は、戦後の反共的キャンペーンのはじまる直前の時期であった。西ヨーロッパの知識人の多くは、ナチズムの残党掃討に血道をあげているか、戦時に果しえなかった研究や著述を戦後の自由な雰囲気楽しんでおり、ナチや日本の軍部なきあとの戦後処理や将来の体制の問題をさほど深刻にとらえずに親ソ的左

翼勢力の未来への展望に気楽に身を委ねていた。反ナチズム、反ファシズムという共通目的で、西側と提携したソヴィエト共産主義がナチの崩壊のあと、どのような拡張主義的な対応の姿勢を示すかということについて、知識人の多くは危惧を抱いてはいなかったし、彼らの大部分は戦中の延長で相変わらず親ソ勢力だったのである。

このような雰囲気のもとで、スターリニズムの恐怖を唱道することはソヴィエト共産主義に理解を示す“進歩的”な知識人から白眼視されることになるのだった。というのも、当時は一国社会主義論によってスターリニズムを一時的な歴史的過程としての必要悪とする観方が強かったからである。しかし、政治の現実はいずれも親ソ的知識階層が革新勢力として言論界で有勢であったことも手伝って、イギリスでは戦後処理を労働党に委せるかたちとなり、チャーチル (Winston Churchill) が構想した戦後の対ソ政策は棚上げされ、チャーチルが政権の座に帰った1951年には、ヨーロッパの対ソ戦略はもはや手を打つすべもない程手遅れとなり、東欧はソ連の支配下に組み入れられてしまっていた。ソ連型共産主義のもつ専制的体質に知識人が気がつくのが遅すぎたというこの事実は政治的民主主義の強化をどれほど困難にしたか図り知れない。従って、オーウェルの『1984年』は、スターリニズムに対して知識階層が示した度はずれた寛容さへの激烈な反撥としてまず位置づけられなければならない。オーウェルにしてみれば、イギリス国民が自由を当然のものとして受取り、「たえざる警戒」‘eternal vigilance’を怠れば自由はたちまち奪いとられてしまうことに気付いていないことが彼を焦立たせたのだった。

当時、オーウェルは自由擁護委員会 (Freedom Defence Committee) の活動的メンバーであり、「たえざる警戒」の一端を自ら担っていた。彼はまた、『ポレミック』 (Polemic) の同人として、言論の自由についてさかんに論陣を張った。その第2号にのせられた「文学の自己規制」 (The Prevention of Literature, Jan. 1946) は優れた論文である。『ポレミック

ク』にはラッセル Bertrand Russell (1872-1970) も参加しており、オーウェルはイートン時代の旧師にあてた手紙の中で、“Bertrand Russell is of course the chief star in the constellation” と書いている⁹。ラッセルとオーウェルが当時同じ陣営に属し、共通の目標を自由社会の実現に向けていたということは注目すべきことである。当時、この『ポレミック』は左翼系の雑誌から目の仇にされていたのであり、オーウェルもラッセルも反撃の姿勢を評論の中に盛り込んでいた。

たとえば、オーウェルはマルクス主義者の科学者で左翼の論壇の雄でもあったバーナル (J. D. Bernal) を論難し、バーナルが、「どのような道徳上の基準も政治上の都合で廃棄できるし、また、しなくてはならない」と主張しているとしてその思想傾向の強権性を批判している。オーウェルは、バーナルの論旨は要約すれば、次のような親ソ的でスターリン体制容認的なものであるという。

Apart from ‘truthfulness and good fellowship’, no quality can be definitely labelled good or bad. Any action which serves the cause of progress is virtuous.

Progress means moving towards a classless and scientifically planned society.

The quickest way to get there is to co-operate with the Soviet Union.

Co-operation with the Soviet Union means not criticizing the Stalin regime.

To put it even more shortly: anything is right which furthers the aims of Russian foreign policy. Professor Bernal would probably not admit that this is what he means, but it is in effect what he is saying, though it takes him fifteen pages to do

so,¹⁰

ソ連に対して親密な感情を抱いている知識人に対して、オーウェルは殆んど抑えることのできないほどのいまいましきの感情と怒りの気分を抱いていたが、それが徹底した冷静さと明確さを特徴とする文体の中に織り込まれているためにそこには一種の緊張した美があらわれている。当時執筆された「政治と英語」(Politics and the English Language)と題された論評の中にはその好例がみられる。

Consider for instance some comfortable English professor defending Russian totalitarianism. He cannot say outright. I believe in killing off your opponents when you can get good results by doing so'. Probably, therefore, he will say something like this:

While freely conceding that the Soviet régime exhibits certain features which the humanitarian may be inclined to deplore, we must, I think, agree that a certain curtailment of the right to political opposition is an unavoidable concomitant of transitional periods, and that the rigours which the Russian people have been called upon to undergo have been amply justified in the sphere of concrete achievement.¹¹

親ソ派の知識人に対するオーウェルの攻撃が、実は深い思想的根源からあらわれた“専制主義への批判”であったことがわかるのはオーウェルが死んだ後の時代である。『動物農場』や『1984年』が出版された当時、それらはともに一種の反共的センセーションナリズムとして受けとられがちであった。しかし、アメリカにおけるマッカーシズムをはじめとする狂気じみた反共運動の潮が退いてしまったあと、本質的な意味から、理論的且つ

冷静にソヴィエト共産主義への批判が行われる時代がはじまったとき、オーウェルの作品は潮に流されることなく残り、新たな重要性をもって再評価されることになる。それはそれに値する芸術的香気が『動物農場』に、また、思想的問題提起が『1984年』にみられるからである。「その時代における最高傑作は、時代を越える」というゲーテの言葉はオーウェルの場合にもあてはまりうるのである。

それにしても、オーウェルが示した激烈な反ソ、反スターリニズムの言動は、当時の知識人の大勢が親ソとスターリニズムに対する寛容さに傾いていたことへの反動であり、オーウェルと同様、ラッセルもまたある意味で孤軍奮闘を迫られたのであった。ラッセルが東ドイツにおけるソ連官憲のドイツ人に対する残酷な仕打ちをナチ以上の暴挙として非難したとき、オーウェルも同じような公憤をもってJ. D. バーナルの親ソ的姿勢を攻撃したのだった。ラッセルは1948年、対ソ不信が昂じたあまり、アメリカが原爆を用いて行う対ソ予防戦争の必要を暗示的ながらも不注意にも提起して左翼陣営にくみするジャーナリズムから手ひどい反撥と批判を¹²蒙ったことがある。こうした視角についてはオーウェルはすでにその前年の1947年の7—8月号の *Partisan Review* に「ヨーロッパの統合へ向け」(Toward European Unity)と題した論文を発表しており、その中でアメリカによる対ソ予防戦争の生起する可能性を、それがもたらす災厄の大きさとアメリカの国制の民主的性格から否定していた。この論文でオーウェルは、ヨーロッパの未来像として三つの可能性をあげた。第一は“アメリカによる対ソ予防戦争”という最も可能性の小さいもの、第二が「冷戦」の継続の後に原子爆弾の保有国が四ないし五カ国となり、その間に戦争が勃発し、機械文明は殆んど完全に壊滅し、復興が絶望的となるような状況になる可能性。第三が、最悪の可能性として、核兵器などの武器のもたらす恐怖心が大きすぎるため、その武器の使用がさし控えられ、その結果、超大国の世界分割支配による専制状況が、永続する可能性である。以

下にその原文をかかげるこの第三の可能性の着想が『1984年』の基本的枠組となった。

That the fear inspired by the atomic bomb and other weapons yet to come will be so great that everyone will refrain from using them. This seems to me the worst possibility of all. It would mean the division of the world among two or three vast super-states, unable to conquer one another and unable to be overthrown by any internal rebellion. In all probability their structure would be hierarchic, with a semi-divine caste at the top and outright slavery at the bottom, and the crushing out of liberty would exceed anything that the world has yet seen. Within each state the necessary psychological atmosphere would be kept up by complete severance from the outer world, and by a continuous phony war against rival states. Civilizations of this type might remain static for thousands of years.¹³

『1984年』は全体主義の未来社会の恐怖を伝える点で論文形式より効果をあげた。これは発売後ただちにベストセラーとなった。当時の読者はオーウェルの意図がスターリニズム批判であると受けとったし、その後も一種の反ソ的パンフレットの役を担わされてきたが、この作品が描き出している世界の恐怖は、色々な意味で、それが書かれた1948年頃の時期以上に、今日、現実性を帯びはじめている。今日、はじめて『1984年』を読む若い世代の人々にとって、この世界は過去のスターリニズムの悪夢としてではなく、自分たちにふりかかるかもしれない今後の現実の政治の恐怖として印象づけられるのである。

『1984年』は物語自体としては殆んど救いが用意されていない。主人公は抑圧のもとに屈してしまう。プロール（プロレタリア）たちがいるでは

ないか——とする読み方は、オーウェルが巧みに左翼のインテリ向きにしつらえた息抜きの箇所を過大視することに通ずる。オーウェル自身はプロールへの期待は捨てているが、プロールへ期待を寄せたがる読者の支持までは失いたくなかったのである。

『1984年』の息苦しく陰惨な世界をオーウェルがつくり出し得たのは、作者自身がこうした抑圧的な体制が究極的には崩壊に向うと信じていたためだったのである。

オーウェルはバーナム (James Burnham) の『管理革命』*Managerial Revolution* を論じたときに、そのことを次のように書いている。

... But at any rate, the Russian régime will either democratize itself, or it will perish. The huge, invincible, everlasting slave emper empire of which Burnham appears to dream will not be established, or, if established, will not endure, because slavery is no longer a stable basis for human society.¹⁴

ウドコックは『1984年』はやはりひとつの小説なのであり、風刺的物語であって、オーウェルの他の小説の主人公と作者オーウェルの関係の場合と同じく、「ウィンストンはジョージ・オーウェルであり、しかもオーウェルではないのだ」¹⁵ といっているが、この論旨はウィンストンと同じ見方をオーウェルがしていたわけではないという意味としてとらえる限り正しい評価なのである。

3 作家の政治的対応

オーウェルが『1984年』を書いた1948年の頃の彼の時代への対応の姿勢は、戦争がはじまった1940年頃とはかなりの開きがある。

彼が『鯨の腹の中で』 (*Inside the Whale*, 1914)¹⁶ を書いているときに第二次大戦がはじまったのだが、この評論の終りの部分で、これからは

確実に全体主義的独裁の時代に入ってゆくのであるが、作家たるものは、自由主義者であるだけに、その全体主義化への過程に参加することができずに死に絶えてゆくのだという意味のことを述べている。興味深いことはこの時代のオーウェルがミラー (Henry Miller) の消極的な姿勢を賞揚していた点である。言論の自由がせばめられてゆく時代においては、ミラーのような受身の態度、静寂主義、「現実に対して素直に従うことによって現実を奪い去る方法」、世界の流れを単純に受け入れ、自分が鯨の腹のなかにいるということを認め、それを忍び、それを記録しよう、それしか残された道はない——とミラーへの理解を示している。これは言論断崖が徹底してきびしくなる時代を予想しての感想であったのに違いない。このような考え方には同調する気持は、オーウェルが自分とは正反対の性格の作家にひきつけられたということからくるものであっただろう。社会全体の動きに背を向け、抵抗するというよりむしろそれを無視する努力をした作家たちが第一次大戦中に最高の作品を生み出したのだと感慨深く反省してみせながら、オーウェルは、ミラーが完全に現実受容的な姿勢を通じて創造作業へ傾倒したが故に『北回帰線』(*Tropic of Cancer*) のような優れた作品が誕生したと見る。その見方からすれば、文学作品は政治とは全く無縁な世界でこそ静かな熟成をうるのであって、優れた文学作品を完成することの方が、なまじ政治に関与することより作家にとっては大切であるということになる。この態度は第一次大戦中のブルームズベリ・グループの態度でもあった。ラッセルの回想録の中に、夜会服を着こんで町を笑いさざめき合って歩く彼らを見かねた老婦人が「あなた方がそうしている間も、戦地ではイギリスの文化を守るために戦って死んでゆく兵士たちがいるのです」とがめると、彼らのうちの一人が、「兵士たちが守ろうとしている文化とは実は私たちなのです」と言い返して老婦人を啞然とさせたというエピソードがある。

オーウェルがミラーのようなタイプの受容型の姿勢の作家に惹きつけら

れたとしても、彼は結局はその方向に歩まなかったのであり、それまでの彼の作家としての傾向からしてそうならなかったのも当然であった。彼は全体主義的な風潮が支配的になるのを黙認するより、積極的に攻撃に打って出て、それによって自分の作品が荒廃することをも敢て厭わないタイプの人間だった。彼は『ペンの自己規制』と題した1946年の評論において、ミルトンの『アレオパジティカ（“言論の自由”）』 *Areopagitica* 刊行300年の記念講演集『表現の自由』 *Freedom of Expression* を検討してみて次のように述べている。

... But an examination of the speeches (printed under the title *Freedom of Expression*) shows that almost nobody in our own day is able to speak out as roundly in favour of intellectual liberty as Milton could do three hundred years ago — and this in spite of the fact Milton was writing in a period of civil war. (Orwell's footnote)¹⁷

このような見方が強まるにつれて、オーウェルにとって、ミラーは、1946年時点ではもはや以前のように賞讃に値する作家ではなくなってしまった。オーウェルはミラーが読むに値するのは『暗い春』 (*Black Spring*, 1933) までであり、それ以降は荒廃をきわめていることを惜んでいる。ミラーが虚無的な静寂主義に陥って、反動的で月並みな作家となり、「ブルジョア民主主義社会内に留って、その社会への責任を放棄している一方で、その庇護を利用している」¹⁸ として、ミラーのように現実の政治的課題に背を向けた態度をとる作家たちを侮蔑的に片付けている。ミラーはオーウェルにとって、もはや“過去の作家”でしかなかった。

とは云え、ミラーの墮落の原因を、創作のエネルギーだった「不幸」を失ったためであるとし、ミラーが政治参加を拒んだからではないことをオーウェルは認めているようである。たしかに、オーウェルの場合、社会的

政治的な問題意識にはっきりと目覚めているとき、彼の文体はひきしまり、作品は充実したものとなった。しかし、これをすべての作家の創作態度に一般的に適用することはできないことをオーウェル自身もよく知っていた。彼は作家が党派的傾向をもつことをむしろ強くいましめる立場に立っていた。1948年に発表した『作家とレヴィアサン』(Writers and Leviathan)で、国家統制下の作家の問題を扱った際、「集団的忠誠は必要であるが、文学が個人の産物であるかぎり、それは文学には有害である」と書き、忠誠心が創造力そのものまでも涸らしてしまうと警告したあと次のように書いている。

Do we have to conclude that it is the duty of every writer to 'keep out of politics'? Certainly not! In any case, as I have said already, no thinking person can or does genuinely keep out of politics, in an age like the present ones. I only suggest that we should draw a sharper distinction than we do at present between our political and our literary loyalties, and should recognize that a willingness to *do* certain distasteful but necessary things does not usually go with them. When a writer engage in politics he should do so as a citizen, as a human being, but not *as a writer*.¹⁹

これは *Inside the Whale* (1940) で肯定した受容的態度と個人性の強調という点で類似してはいるが、次の引用に見られるように、決して政治に近づかないように要請しているわけではなく、むしろ、政治へのか

作家の姿勢の概念図

IV	親ソ派 体制擁護派 (受容的)	I (党派的) (トロツキスト?) (変革的)
	H. ミラー	G. オーウェル
III		(個人的) II

かわり合いの問題である。

この推移をとらえやすくするために概念図を描いてみよう。

この概念図からみると、ミラーは体制受容志向であるが故にオーウェルの批判対等となるが、個人的活動としては同調する。左翼の親ソ知識人に対しては、体制受容的で党派的であるが故に二重の意味でオーウェルの反撥を買ったのである。

しかし、オーウェルの対ソ批判は全く展望のないものではなかった。彼は「米ソ二大陣営のどちらを選ぶか」という当時流行した質問を自らに課して、「アメリカを選ぶ」と答えるものの、ソ連の独裁体制といえども、もし一世代の間、アメリカとの間に戦争がなければ、もつと自由で危険の少ないものになるかもしれないと考えた。これは1947年のバーナム論においてであるが世界のどこか（オーウェルの想定ではアメリカ大陸）の広大な地域で民主的社會主義を機能させ、強制収容所を伴わない経済的保証の成功を示して見せたら、ソ連の独裁制の口実は消滅し、共産主義はその魅力の多くを失うだろうと書いている²⁰。

この見解は、50年代にラッセルが抱いた見解でもあった。ラッセルは『私はなぜ共産主義者でないか』の中で次のように書いた。

The way to combat Communism is not war. What is needed in addition to such armaments as will deter Communists from attacking the West, is a diminution of the ground for discontent in the less prosperous parts of the non-Communist world. In most of the countries of Asia, there is abject poverty which the West ought to alleviate as far as it lies in its power to do so. There is also a great bitterness which was caused by the centuries of European insolent domination in Asia. This ought to be dealt with by a combination of patient tact with dramatic an-

nouncements renouncing such relics of white domination as survive in Asia. Communism is a doctrine bred of poverty, hatred and strife. Its spread can only be arrested by diminishing the area of poverty and hatred.²¹

4 任 務

オーウェルの闘いは何であったのか。それは文学上の新しい手法や表現を見出す闘いであるより、多分に政治的な闘いであった、オーウェルは優れた文学的資金を有していたが故に、その政治的文学が単なるパンフレット作家としてのセンセーショナルリズムに墮することを防ぎえた、とは云え彼が少くともあと10年命脈を保っていたならば、彼の予定した1945年を題材とした作品は『1984年』よりは更に文学的な価値を加えたものであったかもしれないのである。

オーウェルが言葉と文学を武器として闘った政治上の闘いは、言論と表現の自由を求める闘いであり、それはヨーロッパの知識人の多くが、19世紀の弱肉強食の論理に対して、平等の理念としての社会主義を対決させ、ソ連に過大な期待を寄せた時代における困難で、誤解を招きやすい闘いだった。オーウェルが『1984年』を執筆した1948年は世界人権宣言が国連総会で採択された年であり、オーウェルの追及したテーマはU. N. 路線でもあったのだが、『動物農場』と『1984年』は発行されると、反共のキャンペーンに利用され、それはオーウェルの評価をしぼらくのあいだ低く見積もらせる原因となった。しかし、オーウェルの死後、米ソの冷戦体勢が生み出した。ソ連を中心とした共産圏諸国における専制的体制の不人気が増大するにつれ、かつてあれほどまでに社会主義を渴望し、平等社会の実現のために多少の人的犠牲もやむをえぬとした人々は社会主義への道の再検討の必要を感じはじめた。このとき、オーウェルの思想上の闘いの真の

意味が浮かび上がってきたのである。

オーウェルについての論文は夥しい数に上る。これはオーウェルへの関心をたかめるといふ点においては喜ばしいことだが同時にある不安を抱かせる。オーウェルの作品や生涯をいくら論じたところで、その努力の程には自由のための闘いにさほどの貢献をしたことにはならないからである。むしろ、オーウェルを読み、その思想と作家としての姿勢を学び、その優れた手法を参考にしつつ、自らの手で、オーウェルの意志をついで、現代世界の抑圧的な政治の実体を暴露したり論じたりすることの方が大切だからである。これは筆者自身への自戒でもある。

オーウェルが今の時代を生きたとすれば、彼は戦乱と抑圧の続く第三世界に取材の旅をしたであろう。第三世界の人々の苦悩と希望について、まだ優れた文学作品があらわれていないという事実は、第二のオーウェルが誕生するまでにはなお時間を要するということなのであろうか。

註

- 1 George Orwell, *Nineteen Eighty-Four* (London: Penguin Books, 1978)
- 2 *Ibid.*, pp. 150-173.
- 3 George Orwell, *The Collected Essays, Journalism and Letters of George Orwell*, Vol. 4 (London: Penguin Books, 1970), p. 210. (以下CEJL4と略記) 邦訳は『オーウェル著作集VI1945-1950』小池滋他訳, (平凡社, 1971年) もっともこれはバーナム論 (James Burnham and the Managerial Revolution) の中で彼がのべている部分であるため、どこまでがオーウェル自身の意見なのか判断としない。しかし、オーウェルがバーナムにきわめて大きな影響を受けたことは事実である。
- 4 Tom Hopkinson, *George Orwell* (London: Longmans, Green & Co., 1953), p. 35. 邦訳, 『オーウェル』平野敬一訳, (研究社, 1956年)。
- 5 George Woodcock, *The Crystal Spirit, A Study of George Orwell* (Boston: Little, Brown and Company, 1966), p. 349. 邦訳は『オーウェルの全体像, 水晶の精神』奥山康治訳 (晶文社)。
- 6 強いて類似のジャンルの作品をあげようとするれば、プラトンをはじめ、T・モア, カンパネラベ, ラミー, W・モリス, S・パトラー, H・G・ウエルズ, A・

ハックスレー、W・ゴールドディングなどによる空想社会小説をあげねばならない。これらの作品はウッドコック風に云えば、それぞれ人間を描くことと、思想を描くことという二つの中心点をかねそなえたものなのであるが、前者より後者に重点がおかれているのが通例である。

- 7 ラッセルは *Symptom of Orwell's 1984* と題した論評で次のように述べている。

Bit by bit, and step by step, the world has been marching towards the realization of Orwell's nightmares; but because the march has been gradual, people have not realized how far it has taken them on this fatal road. Only those who remember the world before 1914 can adequately realize how much has already been lost. Bertrand Russell, *Portraits from Memory* (London: George Allen & Unwin, 1956), p. 203.

- 8 CEJL 4, p. 505.
9 CEJL 4, p. 178.
10 CEJL 4, pp. 187—88.
11 CEJL 4, p. 166.
12 拙稿『バートランド・ラッセルと対ソ予防戦争論』（広島大学『広島平和科学 1, 1977年）。
13 CEJL 4, p. 424.
14 CEJL 4, p. 214.
15 Woodcock, *op. cit.*, p. 221.
16 CEJL 4, pp. 540—78 鶴見俊輔訳。オウエル著作集 I, 459—95ページ。
17 CEJL 4, p. 81.
18 CEJL 4, p. 135.
19 CEJL 4, p. 468.
20 CEJL 4, p. 370.
21 Russell, *Portraits from Memory*, pp. 213—14.